宍粟郷土研究会報
No. 15 38. 2. 1
兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
宍粟郷土研究会
TEL. 750

宍粟俳壇の回顧

安井坎軒

宍粟郡内特に山崎附近には江戸時代に相等の俳人があつた事は、近村に散在する句碑などで推察出来るが、年月の古いほど文献もなく口碑に伝わるものも極めて少ない。本会々誌弐号紙上で島田先生の四睡庵素練の記事があり、その時代に姫路に有名の俳人が居たので、宍粟郡にも其影響で俳人が居たのではないかと書かれているが、委しき事は殆んど不明で、素練は青蓮寺の僧であり、寛政四年（一七九三年）に西播蕉門俳誌『みつ音どり』と題した小冊子を印行し、更に翌寛政五年芭蕉翁歿後百年忌に記念句集『風月集』を出版しているので其の時代の事は之等文献により山崎町及び郡内に俳人が相当あつた事が想像できる。これら句集の中には素梵、阿丘、孤月、梅里、杏雨、仙斧、蝶翠などの俳句があり、更に安志に牧園、古人里があり、曲里に除角、西谷に一碧などが見えて居る。猶此時代の合作軸が山下駿治氏にあり日露舎杏雨、百香舎彭水、四睡庵素練、不掃庵素梵、が句を書いており之等俳人があつた事は立証出来るのである。

素練は享二年八月十九日死亡五十九才であつた。素練死亡後に其俳友又は門人によりて建立されたと思わるゝ句碑『木の下は汁も鮗も桜かな』芭蕉翁『月一つ松に残りて野分かな』四睡庵『下り船砧遠うなり近うなり』如水観の三基が現に山崎町段観音境内に並んでいる。口碑に傳これ等句碑は元埴尾神社にあつたのを移転したと伝へている。素練死亡後其十三回忌には水鶏舎孤月、銀花亭仙斧、好古亭立志、餘各斎玉鉉、四人共輯の『秋月』が発行されているのを見ても素練は宗匠格であつたと推定出来る。

素練死亡後明治まで約六十年間にも山崎には桐等の俳人があつたが、此時代には山崎町には和歌が盛んで前野真門稲岡秋平、樽井守城、など有名の歌人も多く俳壇は附随の形になつて居たのではないかと推察出来る。その為俳人の中にも、又和歌を作りその歌も残つて居る。俳人としては安井克彦、妹尾立志、山下檣東、小森年足など知られているが安井金三郎氏所蔵の合作軸には孤岳、年足、玩水、樟園、雪英、謙夫、の俳句が見えるが此人々は幕末の方々で明治になつてから亡くなつた人もある。小森年足は安政二年四月十二日に船元川原に『この道や行人なしに秋の暮』という芭蕉翁の句碑を建立して居る。碑は高さ四尺六寸中

壱尺八寸自然石で稀に見る立派な句碑である。碑石は今宿より台石は川戸より取寄せたので其当時工費慶長小判七枚を要したと伝えられている。年足は通称仁右エ門、二頃庵と号す。万延元年十二月七日に歿、行年四十五才であつた。猶此時代に建てられたと想像出来る句碑が最上山にある。『夜深さや月の雫の落る音』蘭堂とあるが、此人は門前の人と聞くも氏名は不明である。

明治二十年頃を中心に山崎町俳壇は一時盛況を極めたものらしい。それは小田青茁（修）が伊勢より小田家へ入家して伊勢の俳諧を山崎へ伝えたのが原因であつた。青茁は能筆の人であつて山崎登記所初代の所長でもあつた。交友も多く他国からの訪問俳人も相当にあつた様である。青茁は明治二十八年十月二十五日五十七才で亡くなつた。此時代山崎の俳人には山下桃里（勢太郎）小田静思（貞）橋本楽山（安興）横尾篠南（直三郎）橋本孝子（田鶴）菊堂戒本（大雲寺和尚）竹原千秋（盛哉）多賀松琴（貫一郎）高井時雨（効三）山下黙成（重時）など多士済々であつた。この中の桃里は後の山崎町長で晩年漢詩で一家を成した人松琴は後の小学校校長であり、孝女は五十波の人で後正式宗匠立机を為した女流作家であつた。

明治三十五年頃より明治末年頃までは山崎町に光風会と称する俳句団体があつて会員も二十三人集まる事も多く筆者もその一員であつた。撰者は一派に拘泥せず全国の有名宗匠に撰を乞ふた。撰者は選句を巻に逆列に執筆して厳封のまゝ選巻されるので、出句者が集つた席上にて開巻披露し最終の秀逸句の人が其巻を貰うので、中々に興味多く風流の楽しみであつた。開巻の場所も北門の晩翠園とか南門の三粋園など毎度集まつたもので、此時代の会員は左の諸氏で熱心に作句を続け光風と云う小冊子を印刷配布し、又各神社への俳句奉納額など残つている。

山本久楽（久右エ門）田宮把琴（肇）武問桜東（忠禎）山下黙成（重時）前野孤月（純一）前野鶯羽（謙助）樽岡岩弓（平裕）小林ふせつ（卯三郎）大西鶴声（鶴治）佐川一陽（行）大坪寄嶺（常吉）安原龍（又市）金井銀玉（金蔵）友沢浩酔（信治）妹尾耕南（泰吉）松本露園（市治郎）大上狼子（静治）吉田溪月（鶴松）

以上は山崎町の人で安富町では中村抱月（清八）梅田可笑（兼太郎）神野では橋本可蝶（田鶴）千種では植田麗琴（武一）など筆者の記憶して居る人々である。この中には後々青木月斗の宝船へ、伊藤松宇の卯杖に永井瓢斉の職味に岩木つつじの摩耶に野村泊雲の木枯に、更に井原井泉水の新傾向句に活躍した人もあつた。

大正昭和時代は所謂月並を脱皮して句作も変り、作者も交代して起伏も多いが後日筆を執る事にした。更に之れ等俳人の故人と成つた人の略歴とその作句は機会を得て発表したいと念願して居る。

安志藩略記

小笠原家

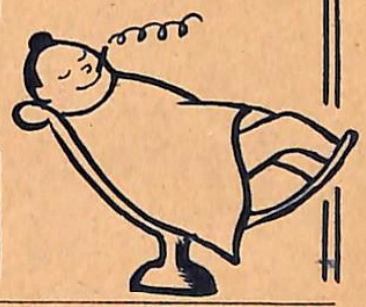
藩翰譜系図巻二によると、清和天皇ー貞純親王ー源経基ー満中ー頼信ー頼義ー義光ー義清以下二十三人で秀政となつている。大抵の小笠原系図は義清から始つているのか多い。源平盛衰記に「甲斐国には小笠原小次郎長清」東鑑の元歴元年五月一日条に「小笠原次郎長清御家人等を相伴つて、甲斐国に発向すべし」と載せ、以下数ケ所に長清の氏名が出ている。

大体小笠原姓は、甲斐国中巨摩郡小笠原邑から起つたもので甲斐源氏加賀美遠光の次男長清からと断定しているようだ。武田氏の一族である。長清は、頼朝に仕えて信濃国守護、仁治三年七月十五日卒。其後戦国時代となつて秀政の先代貞慶のとき、信玄に甲斐を追われ、上杉、北条、徳川、織田、豊臣など転々と保身に苦慮。秀政に至りてはつきり徳川の家人となつた。慶長十八年から信州松本で八万石に封ぜられていたが、元和元年大阪役で戦死、四十七才。この時長子の忠脩も共に戦死したので、忠脩の子長次幼なくて忠脩の弟忠真に預けられた。然し忠真は兄の遺領管理を間もなく辞したので元和三年明石で十万石、寛永九年豊前小倉に十五万石で検封。幼児の長次は、寛永三年龍野六万石に封ぜられ、同九年豊前中津八万石と移る。寛文六年五十二才で歿。長子長章多病で寛文三年卒、二男長勝が襲封、天和二年三十七才で歿。そのあと長章の男長胤相続、ところが身の行い正しからざるにより元禄十一年領地没収小笠原忠雄に領けられ、宝永六年四十二才で卒。ただし由緒ある家なればとて、弟長円が新地四万石で中津藩主となつた。正徳三年三十八才で死亡したが、長子の長鎧三才で襲封、六才で早世。御家断絶の危機であつたが、弟長興の五才になるを跡目とし、豊前中津四万石から播州安志一万石へ転封。ところが安志初代の長興殿様は、多病であつたのか、いつまでも出仕をせぬので親戚らはらはらして、遂に本家格の小倉藩忠基の二男、総次郎長達を養子として長興を陰居せしめたということである。

尚、秀政の二男忠真は、父兄共に戦死のあと信州松本で八万石の遺領を管理していたが、前記のとおり明石から小

岡野パン特約店
茶菓子
松原商店
山崎町中央通商店街
電話七七番

本鹿沢
西川理髮店
電 五五八



倉へと移封。寛文七年七十二才卒。その子忠雄ー忠基あと八代目忠幹で明治。忠雄のとき、弟真方に一万石を領ちて小倉支藩千束藩ができた。十一代目恆までつゞいている。

秀政の三男忠知は、寛永九年豊前杵築四万石に封ぜられ正保二年三河吉田に移り四万五千石、長 熙の時代に遠江掛川へ、長恭の時奥州棚倉へ、長昌のとき肥前唐津六万石となり明治まで。最後の藩主は小笠原長生。

安志藩主略譜

長興（一七一二ー一七八六）

長円の二男、正徳二年生、兄長邕が享保元年九月六日六才で卒したので、そのあとをついで藩主となつたことは前記のとおり。享保十五年就任、多病の割に長生きして天明六年六月二十四日歿、年七十五。法名謙光院清隱紹貞。

長達（一七一三ー一七七〇）

豊前小倉藩主小笠原忠基の二男。正徳三年生。幼名徳次郎、享保十五年長興の嗣となり信濃守叙任。明和七年八月十八日五十八才で歿。法名景雲院天寧宗祐。

長為（一七四五ー一七八二）

長達の男、延享二年生、初め惣次郎、信濃守、明和七年襲封、天明二年二月十二日卒。年三十八才。法名明鑑院心嶽宗印。

長禎（一七八一ー　）

長為の男、初め豊松丸、惣次郎、天明元年生。天明二年襲封したから若い藩主である。寛政八年に信濃守叙任。

長武（　ー一八三九）

長禎の男であるが、生年襲封年次不明、幼名豊光丸、信濃守、天保十年八月二十一日歿。

棟幹

長武の男で、初め貞幹、封をついで信濃守となつたが、萬延元年豊前小倉の忠嘉の跡をつぐことになり忠幹と改めた。戊申の役に功あり、明治十七年伯爵に列せられる。

貞孚（一八五〇ー　）

棟幹の男、嘉永三年生、幼名幸松丸、萬延元年襲封、明治二年版籍奉還、後に子爵となる。

文久武鑑抄

家格は帝鑑間詰、譜代で家紋は三階菱、家老ー小笠原次

郎兵衛、犬甘内記。中老ー犬甘治右衛門、犬甘多宮、用人ー木部新左衛門。遠藤宇右遠門。御城使ー原田賀十郎。添役ー松尾邦五郎。

安志谷探訪記

本会々員六十名は昭和三十六年十一月十一日好天に恵まれて安富町の神社仏閣、名勝、文化財を心ゆくまで鑑賞した。順をおつてその概略を紹介するが、特に安富町教委の宇野定憲氏、中学校の松下校長、野中龍二、建部恵潤両先生、関部落長岸本武治氏等に大変御迷惑をかけたことを感謝します。

光久寺　町役場の西北、役場前で下車して、中学校前から左折して不動明王立像のある光久寺へ。当寺は住職が兼務で常住されていないのが残念。由緒ある寺だから何とか町の方も一考を欲したい。不動様の開帳を願つた沢だが、照明がローソクだから中々御顔が明瞭に拝めない。不動様は木造で、当寺の本尊、高さ一二三糎、大正五年五月二十四日国宝指定、一木造りの古い様式だが、相好は温和であるから藤原末期といわれる。所伝では高倉天皇（一一六九ー一一八一）の御代信濃国の大守加賀美遠光が、病気平癒を祈願して快復された賞として本像を賜つたもので、加賀美氏の子孫である小笠原家に伝わり、九州などへ離さず持ち歩き、当地へ享保年間に封を移されたとき祈禱寺である当寺に安置した。当寺には、大正六年四月五日指定の迦伐蹉尊者像と注荼半託迦尊者像の室町初期の二体があるが、見ることが出来なかつた。

加茂神社　寺の裏道を左に取つて参道に出る。この宮の環境は素晴らしくよい。国道からえんえんと参道を登つて山麓の社まで、途中大木の並木あり感じがよい。安志、富栖の氏神、秋祭は近在に比を見ない賑わしさを呈する。神社前に点在する杉の大木に一同感嘆、当社は点観以前の創立と伝えられ、元官幣大社加茂別雷神社の分霊を祭る古社で、武門の崇敬が篤かつたという。宝物では、飯綱鎧、諏訪法性兜などが有名である。

五重石塔　山麓に添つて東に降り、今念寺の墓地に至る。墓の中に異彩を放つている石造層塔は、播磨に現存する最古の石造塔で、五重塔、凝灰岩、高さ一九一糎、相輪を失

漬物調味料、果樹、花木、苗木
蔬菜種苗、麹もやし、殺虫剤
太陽熱温水器
三木金之助
山崎町西鹿沢（八幡神社下）
電 六七八三番

調味料をかき餅に入れると、色も良く砂糖を入れたよりよろしい。

つているのが疵で、重文指定に待つたをかけられている理由。今念寺奥様の話によると、この寺もと皆河にあり、塔も移転された由。何十年か昔にこの塔を百万円で買いたいと申出た者あり、但し相輪を備えての条件で、檀徒一同の旧寺跡を大探索したとのこと。結局見つからなかつたので現存している訳らしい。一番下の台石に、中央に弘安三年庚辰二月日、右側に造立願主、左側に沙彌成仏と刻されている。六百八十三年前のこと。播磨石造美術史に重要な位置を占めるものである。この石塔に銘々の感慨を残して、今念寺の大きな薬師如来など拝観、富栖県道に出て北進旧富栖村に入る。

古仏群　皆河の梅岡屋敷の一隅に立腐れていたと伝えられる古仏群は、現在建部氏の善照寺の管理で、一堂に収められている。梅岡屋敷の上の山麓にあり、十数体の尊仏遺憾ながら完全品がない。専門家の鑑定によると平安朝時代にさか上る作品とか、昔々にこの近辺に相当な寺院が存在していたことは信用してよい。残念なことにその寺号も何も不明で、将来の研究に待つより外ない。ともかく彩色の名残りの見える仏群に敬意を表わして更に北上した。

千年家　皆河部落の古井徳治氏の住家で、昔から千年家として名高く、神戸市兵庫区山田町の二軒と共に県下三つの千年家の一つである。心よく家人の人らによつて説明を聞きつつ、上りこんで亀石を見せてもらつた。神戸の伊和神社の鶴石に対しての名称で、瑞石というもの。床の間の横に根が生えたように頭を出している。千年家の価値については伊藤鄭爾氏「中世住居史」（東大学術叢書十四）に詳細に出ているらしいが、室町時代の民家に間違いないらしい。最も建築当時の柱が多く残つているのが特長で、手斧仕上げの黒光りする柱にさわつて見る　裏に廻つて古い分の厚い壁の残つているのを感心して見る。壊れかけているところなんか修理しない方がよいと専門家は勧告するそうだ。ともかく近年その貴重さも再認識され、訪問者あとを絶たぬという。教委会から平面図のついた説明書を頂いて、今更草葺の屋根を見上げたことである。

水尾神社　皆河の奥が関部落で、関部落に入つて、川に山が迫り大巌石が道端にあるところにお宮がある。この大石は有名で二百五十年前の郡誌にも記載してあり、入口長さ五尺巾二丈ばかりの大石、西山の裾より出て東の川岸にのぞみその下、中程に長さ六、七尺ばかりの石柱が真すぐに立

おしゃれの粧装品
趣味の手芸品
和洋裁附属品
おしゃれの店
シオン
山崎町山田町商店街
TEL. 549

ちその上に大石が差えられている。この石門のようになつているから、この内の里を関村という。と解説している。近年まではこの大石の東側川添いの道を通つていたが、バスの通うようになつてから大石の西側を堀割つて、山から石をはなし、裏側を新道が通つている。とにかく大石で、一行が記念写真のバックになつたことである。このあたり川中に奇岩、怪石がごろごろ。一つ一つ名があつて豪壮な気分のするところである。ここから石段を登つて右側に本殿あり、祭神円象女神（水神様）である。ここの川安師川は、安師比売神の名をとつたと風土記にある。この女神に伊和大神がプロポーズして肘鉄を食い、仕返しに川の源を塞ぎ三方の方へ流した。だからこの川の水が少ないのだと書いている。このために本水神様を祀つたところ、境内から清水が湧いて断水をまぬがれたと由緒に伝えている。鎌倉時代には関大明神といつたらしい。

播磨鑑には、この山の上に平屋家敷という跡あり、馬場もあり、其脇に亀岩とて亀のような岩あり、又四間ほど高く積重ねた二間四方の折数のように一枚づゝ重ねた岩五十枚ばかりあり、おしき岩というと。それよりも近年神職の杉下家に渡辺彌兵衛を中心とした文祿年間から寛永年間にかけての右文書三十三通を発見、姫路の橋本政次氏は彌兵衛が福島正則の家臣であるとの説を出されているとか、この文書の研究成果を期待したい。

バス停終点で下車、近くの松下校長邸で昼食小憩、いよいよ鹿ケ壺探訪である。

鹿ケ壺　有名な割に実際に来に見る人は、案外少ないのではないか。自分も数歩に一度来ただけである。いま来て見て昔に変らぬ足場の悪さ、即ち道らしき道がないのに感心した。部落から川を渡つて北の谷であるが谷川の一枚岩に次々と十二の岩穴がある。下の壺から見てゆく訳だが、しめつた落葉、ぬれる岩肌を踏んで借り物の草履で、綱を張つてもらつてやつと登つてゆく有様。こういうところが鹿ケ壺のねうちでもある。或所は滝をなし、黒く底見えぬ深さを見せる壺は底なしと伝え、鹿谷村に続くなどという清涼の谷水に足を湿らして一つ一つの壺をのぞきこむ。鹿の足跡に似たとか、鹿の寝ている形の壺だから鹿ケ壺というとか云われるがこんな話もある。光仁天皇宝亀四年（七七三）の頃、一大鹿が顕われ、いささ王という。年経ると久しく篠が背中に生えていたとか。長さ七尺、高さ七尺

角に七つの草かり、足に水かきあり、険阻の山中を往来して、吠え怒れば、草木動揺、人も鳥獣も顚倒卒死したという。遂に村里に乱れ入り、民家退散の憂き目にあつた。よつて上関に達し勅命によつて武夫大勢山中を囲み、木を伐り、山を焼いてとうとう射殺された。この鹿の住んでいた所だから鹿が壺と名付けたと。なお、退散の人々安堵の思いで家に帰つたので、此谷を安志谷といつたとおまけがついている。

とにかく十二分に鑑賞して上の山道から下山。更に希望者を募つて三ケ谷滝を見にいく。道は険阻であるが、中々の大滝、水量がいまは減つているが、も少し行きよい場所にあつたらばとの感慨は捨て切れない。

紅葉には少し早いが、秋山を満喫して帰路安師比売神社を左手に眺めて安志町にさよならをした。

（俊　記）

薪・炭
豆炭
石炭灯油
燃焼器具
プロパンガス

有限会社
長尾燃料

山崎町西町
電二四五番

"山崎闇斎の学問"についてお断り

東大教授の阿部吉雄氏が、昨春下村記念館で講演された「山崎闇斎の学問」という有益な御話は、なるべく大勢のお方にその内容を知つて頂きたいと、本会は町教委の肥塚氏に依嘱し、そのテープレコーダーから速記を取つてもらいました。そして、会報一三号一四号と連続掲載。何分長いので本会報に分載してあと四。五回続ける予定でした。少々間の抜けることだし、会報の頁数が制限されているので、まあ三ケ年計画ということでした。ところが、昨年末に、山崎町からこの講演冊子が刊行され、町内外にある程度頒布されました。その上神戸市の「のじぎく文庫」から会報別冊として、のじぎく文庫読者全部に贈呈された。よつて、本会もこれが掲載を再検討して、長期に断片的に掲載して保存する意義の大半は失われたものと結論を出して本号から掲載を中止することにしました。

本記事について並々ならぬ熱意と努力を示して頂き、厄介な面倒な筆記を完成下さつた肥塚氏に申訳ない状態になりましたが、深く謝意を表します。

頒布の冊子は、版は同一で、紙質と装幀が違うだけ。木像と二碑石の写真版入り。二三頁、横綴じ、縦十三糎、横十八糎。内容は一播磨と儒学八播磨の三宅尚斎むすびというように八項に小見出しがつけてある。

小笠原氏系譜

長清 ― （十六人略） ― 貞慶 ― 秀政

- 忠脩 ― 長次 ― 長勝 ＝ 長胤 ― 長円 ― 長邕 ＝ 長興 ＝ 長達 ― 長為 ― 長禎 ― 長武 ― 棟幹 ― 貞孚 ＝ 長丕（播磨山崎）
- 忠真 ― 忠雄 ― 忠基 ― 忠綜 ― 忠苗 ＝ 忠固 ― 忠徵 ― 忠嘉 ＝ 忠幹 ＝ 忠忱 ― 長幹（豊前小倉）
  - 真方 ― 貞通 ― 貞顕 ― 貞温 ― 貞哲 ― 貞謙 ＝ 貞嘉 ＝ 貞寧 ＝ 貞正 ＝ 貞規 ＝ 愛子 ＝ 寿長 ― 恆（豊前千束）
- 忠知 ― 長頼 ― 長祐 ＝ 長亮 ― 長潔 ＝ 長庸 ― 長恭 ― 長堯 ― 長昌 ＝ 長泰 ＝ 長会 ＝ 長和 ＝ 長国 ＝ 長行
  - 長生（肥前唐津）

安志1 2 3 4 5 6 7

安志藩石高表（嘉永三年）

宍粟郡

1	安志町	605石	6.斗	0升	7合
2	三森村	120	4.	2.	3
3	名坂村	266	4.	1.	4
4	末広村	69	0.	2.	3
5	枌原村	84	2.	3.	3
6	母栖村	44	9.	3.	0
7	梯村	30	6.	9.	9
8	塩田村	126	9.	1.	2
9	葛根村	478	1.	1.	2
10	田井村	453	4.	5.	8
11	須行目村	404	4.	7.	0
12	市場村	515	1.	3.	6
13	構村	108	4.	6.	5
14	杉田村	152	4.	0.	0
15	東安積村	322	0.	2.	8
16	能倉村	425	2.	0.	9
17	野田村	349	3.	9.	0
18	東河内村（福田組）	257	1.	0.	3
19	同上(木谷組)	327	5.	8.	9
	小計	5141	6.	8.	3

赤穂郡

1	菅谷村	205	1.	3.	1
2	下頃村	35	7.	8.	3
3	横尾村	430	7.	2.	9
4	釜嶋村	313	3.	8.	6
5	大板新村	231	8.	0.	4
6	柏野村	52	0.	2.	0

赤穂郡

7	鍛治村	225石	9.斗	1.升	0合
8	倉尾村	187	5.	4.	6
9	小皆坂村	108	7.	6.	3
10	黒石村	162	5.	1.	3
11	市原村	115	1.	6.	1
12	板位村	57	9.	3.	9
13	富寺村	51	5.	6.	8
14	国見村	68	6.	9.	8
15	楠本村	94	7.	1.	5
16	能下村	70	6.	9.	8
17	小野豆村	77	7.	8.	6
	小計	2527	3.	1.	8

佐用郡

1	山田村	55	1.	2.	2
2	中山村	181	7.	2.	7
3	蔵垣内村	146	6.	6.	0
4	本郷村	372	4.	4.	1
5	大垣内村	277	0.	6.	9
6	皆田村	240	2.	0.	8
7	早瀬村	273	5.	1.	3
8	仁位村	262	0.	3.	4
9	円光寺村	221	9.	2.	1
10	櫛田村	226	2.	7.	0
11	三尾村	74	0.	2.	5
	小計	2330	9.	9.	9

計	10,000	3.	0.	1

鳥取見学旅行

昨年の九月二十三日本会主催の見学旅行を実行した。参会者満員で三台の神姫観光バスにて出発、途中引原ダム長源寺下に休憩、戸倉トンネル頂上にて暫く下車、国境の空気を満喫して、若桜町を通過し鳥取砂丘へ直行した。原始の謎を秘めて起伏する東西十六粁南北二、五粁の大砂丘は真に天下の大観であつた。記念の撮影などして自由行動後帰路鳥取城趾は車内説明を聞きながらや温泉旅館に到着昼飯後に名物で文化財の傘踊りを見る。若い男六人が白鉢巻と襷がけで澄み切つた歌と笛に合せて踊るのは中々の壮観であつた。そのあと温泉に入りなごやかな心で帰路につく。雨となつたが此旅行には支障なく午後八時に帰着した。

馬医嘆願書（天保年間）

乍恐奉差上歎願書之事

山崎組山崎村馬医

願人　幸右衛門

私儀先祖より桑嶋流牛馬之治療仕候に付先祖者御用向被為　仰付難有奉存候然ル所父幸右衛門儀者多病に而漸隣村又者追り来候牛馬丈療治仕候所従　御上様茂御用向可被御付由ニ而御尋茂御座候得共何分前文之通病気御座候故分家九郎太夫江御用被為仰付於私儀難有奉存候私先祖より家伝之療治仕候儀に御座候得者右同人同様に相応之御用向茂御座候節者被為　仰付被下置候様仕度奉願上候右御儀奉願上候茂甚奉恐入候得共先代ニ相勤候儀ニ御座候者先祖江対シ相続之申訳茂無御座候様奉存候而甚歎ケ敷御座候に付誠に乍恐御歎申上奉願上候何卒格別之御憐愍を以御用向被為仰付被申置候様仕度一応ニ御慈悲之程奉願上候右願之通被為仰付被下置候者広大之御慈悲難有仕合奉存候以上

山崎組山崎村馬医

願人　幸右衛門

組頭　清兵衛

同　惣右衛門

庄屋　後藤作太夫

天保六未年

尚末尾に張紙して左の文句記入

明和年中ニ朝鮮人来朝之砌江府江御馬御献上に相成り其節御馬之御供も被仰付候然処曾祖父幸右衛門

郷土の産業と共に歩む飛石機械！

飛石機械

山崎町役場前
TEL. 659

会員名簿 (13)

本町　谷林次男
北魚町　山内すゞ子
旭町　福井好雄
大才町　長谷川すゑ子
〃　福本いくの
今宿　田淵ちづ
中広瀬　谷口さつ
山田　柴尾ナカ
〃　岸本常吉
〃　柳田みつ子
中鹿沢　平尾筆五郎
門前　川本順治
河東　小林才一郎
神野　藤井安治

本町　久崎新太郎
北魚町　川口貞一
上寺　福井定雄
大才町　西谷さだ子
今宿　福井政一
〃　戸敷とよ
山田　林より
〃　岸本きり
〃　岸本朝治
中鹿沢　中司綱太郎
〃　上田その
河東　庄野恆子
神野　藤井条治
〃　橋本清

雑報

○闇斎神社秋祭典は、十月十七日奉賛会と本会共催で執行村上町長、助役、奉賛会等の役員外三十余名参列。

○同日午後二時から下村記念館で、県文化係長島田清氏の藤原惺窩先生の講演あり、其後で質疑応答など活潑な意見が出て盛会であつた。

○日向市（本町出身）の藤本明遠氏の寄進によつて闇斎神社本殿の周囲に瑞垣をめぐらされ神社としての壮厳さを加えました。

後記

本号は、安志特輯的になりました。本記事について安富中学の野中龍二氏の協力を感謝します。紙数の制限のため概略だけで申訳ありませんが、安志方面の研究意欲の刺激になれば幸いです。

毎度のお願いですが原稿を出して下さい。

〆切四月十五日。次回五月一日発行。

各種時計と眼鏡
高須時計店
東鹿沢県道通
修理迅速正確